

浄土宗西山禅林寺派

潮音寺だより

<http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/>

ナモの寺 検索

〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

第317号
平成22年3月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

choonji@aichi.email.ne.jp

【出典】『寒山詩』「身着空花衣、足躡亀毛履、手把兔角弓、擬射無明鬼」による。寒山が、一切の執着を離れた「無相」の境地を述べたもの。



無明の鬼と射んと擬す

手に兔角の弓と把り

無明
暗ければ

身に空花で織った
衣をまとい
足に亀毛で編んだ
靴を履き
手に兔角で作った
弓を引き
心 怯え戦き
幻影の鬼を射んとす

無明
明ければ

身に空花で織った
衣をまとい
足に亀毛で編んだ
靴を履き
手に兔角で作った
弓を取り
心 自由自在に
無明の鬼を射倒さん

寒山拾得 (中)

寒山の人物像を、その詩の中から探ってみると、「少小より経を帯びて鋤き、本と兄と共に居む。他の輩の責むるに遭うに縁り、剩つさえ自妻に疎んぜらる」とあり、もとは農家の出身で、若い頃より、読書したり、兄と共に田を耕したりして過ごし、結婚もしますが、何かトラブルがあり、人から非難され、あまつさえわが妻にも疎んぜられるようになり、いたたまれず家を捨て、放浪の身となります。以後、文官になることを夢見て、難関といわれる科挙に合格することをめざしますが、果たせず失望し、天台山の寒巖に隠棲することとなります。

道の隠士と呼ばれるようになるのです。寒山は、寒巖にあってどのような自由な心を獲得していったのか、いくつかの詩から味わってみることにいたしますよ。

◎一三八

人生百に満たざるに

常に千載の憂いを懐く

自身病い始めて可ければ

又た子孫の為に愁う

下は禾根の下を視

上は桑樹の頭を見る

秤槌東海に落ち

底に到って始めて休むことを知る

【解釈】人の一生は百年にも満たないのに、人は常に千年もの憂いを抱いている。自分の病気が漸く治ったと思つたら、今度は子や孫のことまで心配してやらねばならない。たとえば、稲の根元の育ち具合を調べるのに下の方を覗いたり、桑の木の伸び具合が気にな

るので、上の方を覗んだりするように。色々心配するが、分銅が海の底に沈んでしまうように、もうこれでおしまいたと諦める。

《私評》人間、せずともよい心配を、死ぬ間際まで飽きもせずしている。死んでから休むのではなく、一休み、一休み。

◎一五五

人生一百年 仏説十二部

慈悲は野鹿の如く

瞋怒は家狗に似る

家狗は趕えども去らず

野鹿は常に好く走ぐ

獼猴の心を伏せんと欲せば

須らく獅子吼を聴くべし

【解釈】人生は長くて百年であり、仏の説法は十二種類ある。慈悲は野の鹿のようであり、瞋怒は飼った犬のようのものである。飼う犬―瞋怒―は追いつけても去らないし、野の鹿―慈悲―はいつもよく恐れて逃げようとする。

猿の心―妄心―を降伏させようとするならば、獅子の吼える声―仏陀の説法、大法輪―を聞くべきである。

《私評》これらの喩えは、『涅槃経』にあるが、言い得て妙である。

◎二九一

身に空花の衣を着

足に亀毛の履を躡み

手に兎角の弓を把り

無明の鬼を射んと擬す

【解釈】身には空華で作った衣裳を着け、足には亀毛で作った履き物をはき、手には兎角で作った弓を手にして、煩惱の鬼たちを射殺してやろう。

《私評》白隠禪師は「自受用の活三昧を述べ」と評し、寒山が心に自由を得たときの法楽が、この詩を読むものにも伝わり、胸がすく。

◎二九五

寒山の無漏の巖

其の巖は甚だ清要なり

八風吹けども動ぜず

万古人妙を伝う

寂寂として安住に好く

空空として譏諍を離る

孤月長えに明らかに

円日常に來たりて照らす

虎丘と虎谿と

相い呼召するを用いず

世間に王傳有り

把りて周召と同すること莫かれ

我れ寒巖に遯れし自り

快活にして長く歌笑す

【解釈】寒山には、無漏の巖があるが、その巖は実に重々しく立派である。どれだけ八風が吹こうともびくとも動かない。いつまでもその靈妙な姿を伝える。そこは物静かで修行するのに良い処で、しかもからりとしていて、人の責めたり誹ったりするようなことは全く無い。一輪の明月がいついつまでも夜の空をあかるく照らし、円い太陽は

いつも天空に現れて光り輝いている。

ここは虎丘と虎谿との清浄な靈地のある所であるが、どちらからも呼び招くには及ばない―この無漏巖のよさほとても虎丘や虎谿とは取り換えられない。

世間には王の補佐役がいるが、その人は周公や召公と同じ扱いをしてはいけない。

私がこの寒巖に隱棲してからは、気持ちさがさっぱりして憂いも無いのでいつも無心に歌ったり笑ったりしている。

《私評》「八風」とは、利益、衰退、陰口、名譽、賞賛、悪口、苦、樂の八種。これらに一喜一憂して動揺するのが我ら凡夫である。似た禪語に「風吹けども動ぜず天辺の月」がある。小さき心の我々にはなかなか難しい。

※注 詩に付した番号、及び、書き下しは、座右版『寒山拾得』久須本文雄著（講談社）によった。また、【解釈】も同著作からの引用である。

◎玄関げんかん

もちろん家の入り口のことなのだ、ほんとはもつと大切なものに至るための入り口であった。「玄関」の「玄」は「幽玄」「玄妙」の玄。すなわち、微妙なる道理のことである。「関」は門。つまり、玄関の本来の意味は、仏教の奥義へ至る入り口を指したのである。

やがてそれが、禅寺の書院への入り口を指すことばになるのだが、これは、学問修行の場である書院内での「玄談げんだん」（経論を講じる前に、経義の深さについて説明すること）は、容易にはつきりさせることができない、簡単に通過できないことをたとえたためである。「玄関払い」という、奥に通さず、あるいは対面もせず客を追い返すという意味のことばがあるが、これには案外、仏教の真理がわからない人間は入るべからざる、というニュアンスがこめられているのかもしれない。

しかしこの玄関が、一般に出入り口の意味をもつようになったのは江戸時代以降のこと。それまで玄関をつけることができたのは武士階級だけで、町人の家には設けることが禁じられていたという。↓

雑記

▼亀毛兎角きもうとかく

「空華くうげ」というのは、病みかすんだ目で虚空を見ると花があるように見えるが、実際には存在しない。「亀毛兎角」とは、亀に付着した藻を毛と思ひ、兔の耳を角と勘違いし、ともに現実には存在しない、実体のないものたとえ。

ちなみに「玄関付の洒落しゃれ」という言い方がある。わざわざ、前に説明がつく下手法な洒落のことをいうが、いつまでたっても仏教の真理がわからない人間も、このように玄関にこだわりすぎていたのかもしれないと思うとおもしろい。

『仏教のことば』早わかり事典

.....

ちなみに、「兎角とかく、この世は住みにくい」の「兎角」は当て字。

▼篆刻てんくつ

これまで、何度か「篆刻」、いわゆる石に彫るハンコ作りに挑戦したことがあります、納得のいくものではできませんでした。しかし、ここで六十の手習い、かすむ目をこすりこすり、再度挑戦！

◆篆刻す釈迦宝印や

涅槃の日 沐魚